

山海塾作品『卵を立てることから—卵熱』 における空間演出 —枯山水との比較より—

お茶の水女子大学大学院 塩田 靖子

1. 問題の所在及び研究目的

山海塾は、1975年に天児牛大（1949—）を中心として創立された男性舞踏グループである。1980年海外に進出し、世界の主要芸術フェスティバルに招待され、37カ国のべ700都市での公演を行う。1982年以降は2年に一度、パリ市立劇場にて新作を発表し続けている。

山海塾作品『卵を立てることから—卵熱』（1986年）（以下『卵熱』）の批評文で、その空間演出は龍安寺の石庭に喩えられており、それは枯山水との類似性を感じさせるものである。

そこで、水を用いずに山水を象徴的に表現する日本庭園の様式である「枯山水」に着目した。本研究では、特に空間演出に焦点を絞り、『卵熱』と枯山水の類似性を導き出すことを目的とする。それによって、天児が作品を通し、文化の違いとして強調する固有性というものが更に明らかになるであろうと考える。

2. 論の進め方

『卵熱』と枯山水について概観した結果、類似する構成要素は、水の主題、白砂、砂紋と盛砂、石が挙げられる。従って、本研究ではこれらの構成要素とそのイメージについて考察する。そして、全体として両方の空間の類似性を明らかにするために、『卵熱』と大仙院及び龍安寺の石庭を其々比較し、考察する。

3. 考察結果

『卵熱』と枯山水の空間における類似性は次のようにまとめられる。

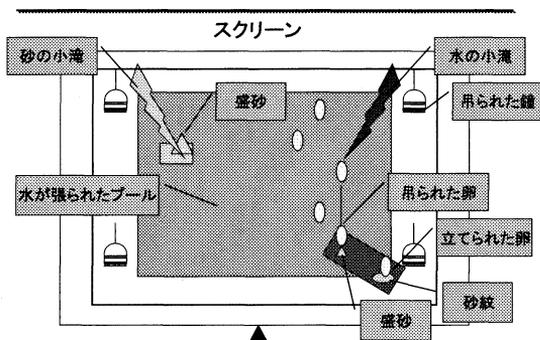
- ①水を主題とする表現が中心であり、従来あるものを異なる素材に置き換えて表現を拡大している：『卵熱』に限らず、山海塾作品は水という主題で貫かれている。日本庭園の表現は水を中心に展開され、それは枯山水においても同様である。枯山水は、それまで主流とされていた本物の水を用いず、白砂を敷き詰めることで水を表現し、『卵熱』は、実際の水を張ることで舞台の固定した床面を変化させた。どちらも、従来あるものを他の素材に置き換えることで、水のイメージに変化を与え、表現を拡大しようとする姿勢が読み取れる。
- ②極力削ぎ落とされたモノによる象徴を用いており、意志的な行為を込めた表現である：『卵熱』と枯山水に共通する素材は「白砂」であり、具体的には「砂紋」「盛砂」という造形である。また、

『卵熱』の「卵を立てる」と枯山水の「石を立てる」は、どちらも意志的な行為を込めた表現である。使用する素材は極力削ぎ落とされ、『卵熱』の「水と砂」は「生と死」、枯山水の「白砂と石組」は「海と島」という、モノによる象徴を用いた表現となっている。

③意図的に平面造形と立体造形が織り成す空間を作り出し、それは水平と垂直の方向を示している：枯山水では平面造形と立体造形が有機的に構成されることを重視する。それに類似し、『卵熱』のプールの水面は水平になり、上方からの水と砂の滴は垂直を示す。プールに落ちる水の滴は水平に、砂の滴は積もって山のようになり、平面造形と立体造形は有機的に結びついている。空間は主に、平面造形と立体造形の意図的な組み合わせにより成立している。

④余白は限られた空間を拡大して見せるように視覚化され、不可視の関係性が作り出す緊張感を保つ空間構成となっている：枯山水における白砂の主な役割は、限られた空間を拡大して見せることにある。そこに石が有機的に統一感を持つように配され、余白は緊張感を保った空間となる。『卵熱』では平静に保たれたプールの水面に波紋が描かれる等、余白が視覚化され、舞台美術が広域にわたって配されることで緊張感に満ちた舞台空間となっている。どちらも不動の快い緊張感を作り出すために、平面における余白と立体造形の計算されたバランスという組み合わせが存在する。

⑤多次元的な解釈が生み出されるように、鑑賞者個人に託された不偏の空間である：枯山水の中でも特に龍安寺石庭は、それ自体が禅の公案のように造られており、多様な解釈が試みられている。天児は作品と鑑賞者が対話し、個人の物語として構築することを理想とする。どちらも鑑賞者に対して、一定の見方を強要するものではない、不偏の空間が原作者の演出により生み出されている。これにより鑑賞者が庭あるいは作品の中に入り込み、空間の多次元的な解釈が可能となるように意図されている。



図：『卵熱』の舞台美術（塩田作成）